

# 武蔵野

本社 江東  
立川 武蔵野

武蔵野支局 〒180-0006  
 武蔵野市中町1の13の1 3F  
 電話 0422(51)3131  
 FAX 0422(51)3133  
 musasino@yomiuri.com  
 都内版編集室  
 電話03(3217)1465・1466  
 江東支局 電話03(3631)6116  
 立川支局 電話042(523)4477  
 ホームページ  
 www.yomiuri.co.jp/local/

購読は  
**Y 0120-4343-81**

【広告】読売Palette  
 03(6272)9027  
 【折込チラシ】 0120-03-4343  
 【読売旅行】 03(5550)0666

4月15日(金曜日)  
 旧 3月15日<大安>

■ あすの暦

通日 105  
 月齢 13.9  
 (正午)



日出 5.09  
 日入 18.14  
 月出 16.35  
 月入 4.23

—東京標準—  
 満潮 4.13  
 16.22  
 干潮 10.25  
 22.37  
 (中潮)

大阪で生まれた茨木のり子(1926〜2006年)は、上京して武蔵野の詩人となります。第一詩集「対話」(1955年)の時は所沢で暮らし、その後は神楽坂、池袋と転々しますが1958年、北多摩郡保谷町(現在の西東京市)東伏見に建築した新居を終の棲家にします。第二詩集「見えない配達夫」が刊行された年でした。従姉妹の建築家とともに設計したその家

## 終の棲家 日常を詩に

### 文人の武蔵野

#### 茨木のり子 ①



西東京市にある茨木のり子の自宅

はユニークで、甥の宮崎治氏は「武蔵野の雑木林に佇むこの住居も茨木のり子の作品の一つと言えなくもない」としています。

戦争責任と真剣に向き合ったのも、朝鮮語を学びやがて韓国現代詩を翻訳するようになったのも、「自分の感受性

くらい」や「倚りかからず」を発表して一躍有名になったのも、この家の暮らしの中でのことです。

蜜柑の木が映える家として知られ、評伝劇「蜜柑とユウウツ」茨木のり子異聞(2015年)では、蜜柑の木のある武蔵野の家をモデルにした空間でドラマが展開されます。

「七夕」「ほうや草紙」「青年」「雀」のように作中に「武蔵野」が登場する詩だけではなく、東伏見と吉祥寺の間のバス移動から生まれた詩「大屋洋服店」なども武蔵野の詩だと言えます。吉祥寺は、同人詩誌仲間である川崎洋や谷川俊太郎らと会うために訪れる場所であり、大好きな詩人金子光晴の住

まうところであり、夫である「Yと吉祥寺」に出る「こ」とを日常とする行きつけの街でした。

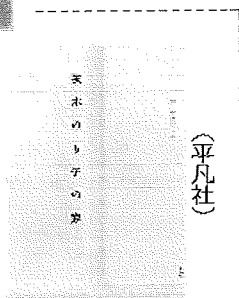
茨木のり子とその作品にについては、東伏見と吉祥寺の間の一帯が武蔵野の中心でした。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

#### おすすめの1冊

#### 「茨木のり子の家」

撮影に2年の歳月をかけた写真集です。「茨木のり子の家」とその家を構成する草稿、書斎、書物、植物、アルバム、家計簿などの写真に、活字になった詩や実測図面が併載されています。キャプションが巻末にのみ纏められているので、本文では写真と向き合うことに集中できるようになっています。



(平凡社)